

祝

# ノーベル物理学賞受賞

# 中村修二教授



青色LED

ドの研究は本学工学研究科の博士論文となっており、中村教授のノーベル物理学賞受賞は徳島大学にとっても大きな名誉であり喜びであります。  
また、この業績が高く評価され、11月3日には文化勲章を受章され、11月4日には文化功労者として顕彰されました。



学長による記者会見の様子(左から、野地研究担当理事、香川学長、原口学科長)

10月7日、中村修二教授（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）がノーベル物理学賞を受賞されました。今年のノーベル物理学賞は、LEDの中でも最も難しかった青色LEDの実現で世界に貢献した3人の日本人研究者に贈られることになりました。

中村修二教授は、日亜化学工業 研究員時代に、苦労を重ねながら青色LEDの製品化にこぎつけました。

赤、緑、青の光の三原色のLEDができれば、光革命が起きるとは世界中の研究者がわかっていましたが、青色だけは困難を極め「20世紀中には不可能」とまで言われていました。

中村教授は徳島大学工学部の卒業生（学部・昭和52年卒業、修士・昭和54年修了）で、青色発光ダイオード

## 恩師 多田 修 徳島大学名誉教授 コメント

中村君の2014年のノーベル物理学賞受賞並びに文化勲章受章は、本当にすばらしいことだ。おめでとうと言いたう。

中村君は、愛媛県出身で1973年に徳島大学工学部に入學した。教養課程では、専ら物理や数学の本を読んでいと聞くが、3年生になり、福井萬壽夫助教授（現徳島大学名誉教授）の物性工学の講義に感銘を受けて、同講座の教授であった私の研究室で研究することになった。

卒業研究の時間には、外国の文献ばかり読んでいたので、実験に集中させるために雑誌を取り上げて注意したこともある。それから、人が変わったように実験好き



写真:前列右側 多田名誉教授、後列左側 中村教授 2013.12.14 多田名誉教授宅にて

になり、大学院に進んだ。当時は、実験装置も売っていなかった。業者に発注したら半年もかかり、いち早く実験結果を知りたければ実験装置を自分で作るしかなかったので、私のアドバイスなどにより、ガラス細工、溶接、旋盤を回すなど何でも自分でやっていた。中村君の実験職人としての姿勢は、就職してからも続いた。修士課程修了後は県外への就職が決まっていたが、事情により徳島に残ることになり、日亜化学に就職することになった。

日亜化学では、運良くLED開発の担当を任せられ、それが「青色LED」の開発につながり、その後、色んなことがあったが、結果的にノーベル賞を受賞することになった。中村君には、徳島大学出身であることに誇りを持ち、関係者への感謝の気持ちを忘れずに精進されることを願っています。

私が出しておられました。中村先生は、大きな予算とマンパワーをかけた大企業が悪戦苦闘し20世紀中は不可能と言われたLED開発を、地方の企業であった日亜化学工業で成し遂げられました。読者の皆さんには、地方大学の教育を受けた技術者が地方の企業で行った仕事に対するノーベル賞は日本初であること、同社の開発チームのメンバーのほとんどが徳大工学部出身者であったことを、是非覚えておいていただきたいと思えます。

## 工学部光応用工学科 原口 雅宣 学科長

私が昭和62年に徳島大学に赴任した当時、中村先生およびその開発チームの方が度々研究室を訪れて来られました。彼らは、当時新進気鋭の厳しさをもち、決して仕事の手を抜かないという独特のオー

## 徳島大学名誉教授、STS 研究部顧問 木内 陽介

中村修二さんのこの度の待ちに待ったノーベル賞受賞に心から敬意を表すると共に、OBの皆様と共に祝福申し上げる次第です。中村さんは丁度私の10学年後輩に当たり、彼が3年次の折に私の講義も受講していますので、教え子にもなります。彼とは専門分野が全く異なりますので、専門的なお付き合いはほとんどありませんでした。先輩・後輩のつきあいが主であったように思います。彼は非常に個性的で、梓にはまらない性格でしたので、時折突っ張った発言になること

もあつたかと思いますが、逆にこれが今回の偉業につながっていると思います。しかし根は気さくな男です。今考えるところの徳島大学はこのような型にはまらない学生でも受け入れる柔軟性があつたように思っています。



赤・緑・青のLED

平成25年度 徳島大学工業会関東支部総会 (2013.10.25撮影) 右から2人目 福井萬壽夫名誉教授、3人目 中村教授、5人目 木内陽介名誉教授



中村教授の修士論文



ノーベル賞受賞記念展示



受賞記念の垂れ幕(工学部)